

プロット① 肉体バトル

「さて、飯も食ったし今日もお掃除の時間だ」

爪楊枝を咥え、手にしたモップをくるりと回し、俺は仕事場へと向かう。
——ここは世界一汚い街、デブリータウン。
世界各地から多種多様なゴミが集められる廃棄物集積都市だ。

「おっ、早速来やがったな」

ゴウンゴウン、五月蠅い駆動音を上げながら生まれる大きな影。
見上げると巨大な飛行船。その船底部分がパカッと開く。
そこから無数の小さな影がバラ撒かれる。
風切り音を立てながら迫り来るシルエットの正体は——機械人形だ。

こいつらはゴミ——と称し送られる機械人形だ。
デブリータウンは世界中のゴミが集められる場所。
ゴミとは情報の塊、故にそれを狙う輩も後を立たない。
そんな連中を処理するのが、俺たち『掃除屋』の仕事なのである。

ガシャアアアアン！ 土煙を上げながら着地する機械人形の群れ。
キューン、キューンとメインカメラが左右に動き、その視線が俺へと集まっていく。
搭載された多種多様な銃火器に刃物……その様はまさに武器の見本市だ。

「おーおー、今回も数が多いねえ」

くるんとモップを回して構えを取ると、地面を蹴った。
直後、俺が立っていた場所が蜂の巣になる音を聞きながら機械人形の群れへ突っ込む。
バキ！ グシャ！ ドスッ！ モップの柄で突きを放ち、俺を囲っていた機械人形のカメラを全て破壊する。
こいつらは遠くで誰かが操縦しており、カメラを破壊すれば大抵は動きが止まるのだ。

「こいつで、ラスト——」

突きを放ったその直後、バキッとモップが折れる。

なんだこのカメラ、硬すぎるぞ！？

……いや、違う。精巧に出来ているがこれはダミーカメラだ。

本物のカメラはその中央部、かなり小型のものが付いている。……なるほど、これはモップが折れるわけだ。

「やっちゃった……そもそもこれも五年近く使ってる奴だからなあ。寿命だったのもあるか……」

「ギギギ……」

一人ごちる俺に、勝ち誇ったように軋み音を上げる機械人形。

「小型カメラか。確かにそれを壊すのはこいつじゃ無理だな」

振り下ろされる機械人形の剣、それを俺は折れたモップで防ぐ。そして一口に含んでいた爪楊枝を吹いた。

ガスッ！ 鈍い音がして機械人形の動きが止まる。

「小型カメラってのはそのぶん強度も低い。それを割るくらいなら爪楊枝《こいつ》で十分ってわけ」

崩れ落ちる機械人形を尻目に、俺は折れたモップを見てため息を吐く。

「やれやれ、なんとか今回も退けられたが……これ、再支給されるかなあ」

もう一度ため息を吐いて、俺はその場を後にするのだった。